

再会叶わず、、、横田 滋さんご逝去 拉致問題を身近に感じ、想いを馳せる

わずか13歳。自分の娘がある日突然いなくなる。こんなことを想像したことはありますか？

娘のめぐみさんが拉致されてから43年、拉致被害者家族会の初代代表、全国で活動を続け、拉致被害者の救出運動の象徴的存在だった横田滋さんが亡くなりました。

一枚岩になること

滋さんの親族は会見で、拉致問題は横田家だけの問題ではなく日本国家に与えられた課題・使命であることを意識してほしいこと、また、日本が一枚岩になり、拉致問題について年齢層を問わず、認識を広げてほしいと述べました。

実際に同じ立場にならなくては、分からないことも多いのは事実です。しかし、同じ立場になれなくても、相手に対して心を寄り添わせることは誰もができることを私たちは知っています。

もし、自分が当事者だったらと想いを馳せ、何ができるか考える。その想いを全国民が持てば、大きなうねりにつながります。

桜が散らないうちに

私たちがよく目にするめぐみさんの写真は、中学校の入学式に病気で欠席しためぐみさんを、写真が趣味だった滋さんが、桜が散らないうちにと嫌がる姿を撮った写真だそうです。

そんなどこにでもある家族の日常のエピソードに、再会を果たせず逝ったひとりの父親の想いと無念さを考えると、涙がこぼれます。

横田滋さんのご冥福を心よりお祈りいたします。